

株式会社 翻訳センター 2023年3月期決算説明資料

2023年5月

株式会社翻訳センター

(東証スタンダード 証券コード：2483)



Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.

株式会社翻訳センター 代表取締役社長の二宮でございます。
本日は説明会にご出席いただき、誠にありがとうございます。
それではこれよりご説明を始めます。

本日のご説明内容

1

I. 2023年3月期 業績

II. 事業戦略と進捗

III. 2024年3月期 予想

IV. 株主還元

本日のご説明内容はご覧のとおりです。

本日のご説明内容

2

I. 2023年3月期 業績

II. 事業戦略と進捗

III. 2024年3月期 予想

IV. 株主還元

まず、2023年3月期の業績についてご説明いたします。

1. 2023年3月期 業績

3

翻訳事業の業績貢献により、過去最高益を達成

単位：百万円、%、円

	2022/3期	2023/3期	増減	
			増減	伸率
売上高	10,337	10,947	610	5.9
営業利益	811	928	117	14.4
経常利益	841	960	119	14.1
親会社株主に帰属する当期純利益	573	686	113	19.8
1株当たり当期純利益	172.14	205.94	—	—

*2023年3月期においてはUS1ドル=132.08円で換算しています。

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、
2023年3月期の業績についてご説明いたします。

2023年3月期の売上高は109億9,470万、YoY5.9%増加、
同営業利益は9億2,800万、YoY14.4%増加、
同経常純利益は9億6,000万、YoY14.1%増加、
同四半期純利益は6億8,600万、YoY19.8%増加となりました。

昨年11月の修正予想と比べると売上と営業利益は若干未達となりましたが、
経常利益と当期純利益は修正予想をクリアし、過去最高益を達成することができました。

2. 貸借対照表

単位：百万円

	2022/3期	2023/3期	増 減
(資産の部)			
流動資産	6,311	6,611	299
固定資産	861	875	14
資産合計	7,172	7,486	314
(負債の部)			
流動負債	1,891	1,618	△273
固定負債	190	195	5
負債合計	2,081	1,813	△267
(純資産の部)			
Ⅰ. 株主資本	5,068	5,630	561
Ⅱ. その他の包括利益累計額	22	42	19
純資産合計	5,090	5,672	581
負債純資産合計	7,172	7,486	314

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、
2023年3月期の貸借対照表についてご説明いたします。

総資産は74億8,600万、YoYで3億1,400万の増加、
負債は18億1,300万、YoYで2億6,700万の減少、
純資産は56億7,200万、YoYで5億8,100万の増加となりました。

3. 損益計算書

5

単位：百万円、%

	2022/3期		2023/3期			
		売上比		増減	伸率	売上比
売上高	10,337	100.0	10,947	610	5.9	100.0
売上原価	5,429	52.5	5,860	430	7.9	53.5
売上総利益	4,907	47.4	5,087	179	3.6	46.4
販売費及び一般管理費	4,096	39.6	4,159	62	1.5	37.9
営業利益	811	7.8	928	117	14.4	8.4
営業外収益	40	0.3	49	9	22.2	0.4
営業外費用	10	0.0	17	6	63.1	0.1
経常利益	841	8.1	960	119	14.1	8.7
特別利益	—	—	—	—	—	—
特別損失	2	0.0	0	△2	—	0.0
親会社株主に帰属する当期純利益	573	5.5	686	113	19.8	6.2

Copyright © Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、
2023年3月期の損益計算書についてご説明いたします。

売上高は109億9,470万、YoY5.9%増加、
売上原価は58億6,000万、YoY7.9%増加、
売上総利益は50億8,700万、YoY3.6%増加、
これらの結果、営業利益は9億2,800万、YoY14.4%増加となりました。

なお売上総利益率がYoYで1ポイント減少しております。これは工業・ローカライゼーション分野において粗利率の非常に低い大型案件を受注したこと、機械翻訳の活用で得た利幅をもとに一部の顧客に対して積極的な価格戦略を行ったことが主な要因です。

売上総利益率はYoYで減少となりましたが、売上総利益額はYoYで増加しており、機械翻訳を活用するという戦略は順調に進んでいます。

4. セグメント別売上高

6

単位：百万円、%

	2022/3期		2023/3期			
	売上高	売上比	売上高	増減	伸率	売上比
翻訳事業	7,828	75.7	8,457	628	8.0	77.2
特許	2,316	22.4	2,708	391	16.9	24.7
医薬	2,904	28.0	2,796	△107	△3.7	25.5
工業・ローカライゼーション	2,028	19.6	2,376	348	17.2	21.7
金融・法務	580	5.6	575	△4	△0.7	5.2
派遣事業	1,212	11.7	1,119	△93	△7.6	10.2
通訳事業	655	6.3	854	198	30.3	7.8
コンベンション事業	220	2.1	152	△68	△31.0	1.3
その他	420	4.0	365	△55	△13.1	3.3
売上高合計	10,337	100.0	10,947	610	5.9	100.0

*その他には語学教育事業および外国出願支援事業などが含まれます。

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、
2023年3月期のセグメント別売上高についてご説明いたします。

翻訳事業は84億5,700万、YoY8.0%の増加となりました。
特許分野は27億800万、YoY16.9%増加となりました。大手通信系企業からの案件獲得に加え、主要顧客からの受注が好調に推移しました。機械翻訳の活用で得た利幅を活かした価格戦略が奏功していることも伸長の要因と捉えています。

医薬分野は27億9,600万、YoY3.7%減少となりました。CRO（医薬品開発受託機関）の発注方針変更による受注減、前期（22/3期）に受注したコロナ関連の案件の反動減が主な要因です。ただ足元ではメガファーマを中心に施策は着実に進捗していますので、進行期（24/3期）は盛り返したいと考えています。

工業・ローカライゼーション分野は23億7,600万、YoY17.2%の増加となりました。前ページでご説明した大型案件の受注に加え、コロナからの最終的なリバウンドもあり、大きく伸長しました。

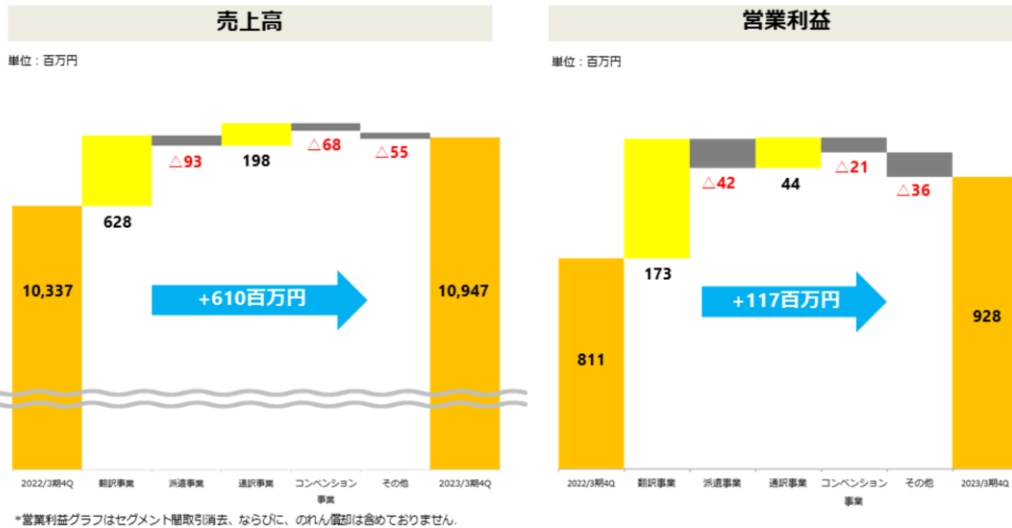
金融・法務分野は5億7,500万、YoY0.7%と減少となりました。IR関連文書の受注が増加した一方、前期（22/3期）に受注した保険関連の大型案件が剥落したため、YoYでほぼ横ばいとなりました。

続いて、派遣事業は11億1,900万、YoY7.6%の減少となりました。コロナ禍の期間は持ちこたえていましたが、23/3期は人員の入れ替えが行われた結果、ご要望にあうスタッフを提供しきれなかったことが要因と捉えています。ただ足元の引き合いは増加に転じてきていますので、ここが底と考えています。

続いて、通訳事業は8億5,400万、YoY30.3%の増加となりました。これはひとえにコロナ禍からの回復だと認識しております。また水際措置の緩和により、対面での通訳案件も増加しています。

最後に、コンベンション事業は1億5,200万、YoY31.0%の減少と苦戦しました。外部環境は回復基調にありますが、競合激化の影響による受注減が主な要因と捉えております。

5. セグメント別動向



Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.

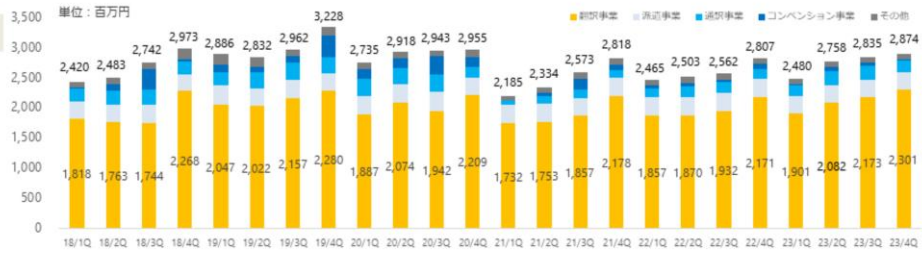


こちらのスライドでは、
2023年3月期のセグメント別動向についてご説明いたします。

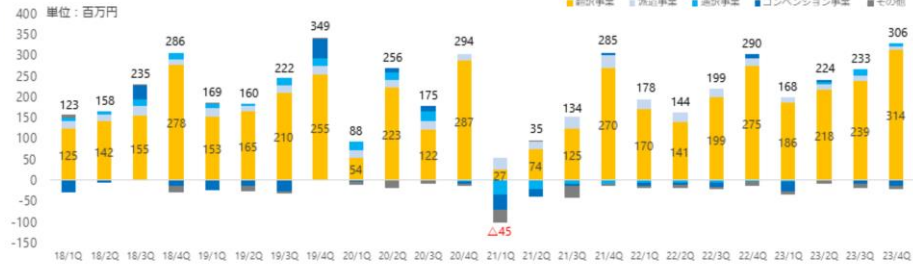
これらは売上高と営業利益を事業別にYoYで比較し、増減幅を示したグラフです。
売上、利益いずれも翻訳事業と通訳事業が寄与しており、その結果、過去最高益を達成することができました。

6. 四半期推移

売上高



営業利益



Copyright © Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドは
四半期の業績推移をセグメント別に示したものです。

第4四半期、なかでも3月の失速が影響し、4Q売上は28億7,400万となりました。ですが、翻訳事業（オレンジ色）に限って言えば、23/4Qは過去最高の売上・営業利益を達成しており、その点においては堅調に成長できていると認識しています。

本日のご説明内容

9

I. 2023年3月期 業績

II. 事業戦略と進捗

III. 2024年3月期 予想

IV. 株主還元

では次に、事業戦略と進捗をご説明いたします。

1. 第5次中期経営計画 基本方針と重点施策

10

基本方針

ビジネス環境の変化やデジタル化の進展に対応しつつ、業界・ドキュメント別に最適化された言語資産の活用モデルを確立し、対象市場でのプレゼンスを高め、持続的な成長を実現する。

重点施策

ドキュメント集約メカニズムの構築

- ドキュメント軸による新たな専門特化領域の育成
- 顧客体験価値向上・案件集約の仕組みづくり

ドキュメント別言語資産活用モデルの確立

- ドキュメント別モデル作成によるMT（機械翻訳）精度の向上
- プロセス改善による生産効率の向上

働き方改革や事業変革を支える経営基盤の整備

- 働き方改革などのニューノーマルに対応した労働・職場環境の実現
- IT人材・技術への積極的な投資と事業変革を支える経営基盤の整備

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、
新たに策定した第五次中期経営計画についてご説明いたします。

基本方針は

「ビジネス環境の変化やデジタル化の進展に対応しつつ、
業界・ドキュメント別に最適化された言語資産の活用モデルを確立し、
対象市場でのプレゼンスを高め、持続的な成長を実現する。」です。

重点施策の3点のうち1点目の「ドキュメント集約メカニズムの構築」と
2点目の「ドキュメント別言語資産活用モデルの確立」は、
専門特化して高品質なサービスを安定的に提供するという当社の強みをさらに推し進めて
いくための戦略です。

具体的な戦略については後ほどご説明します。

重点施策の3点目「働き方改革や事業変革を支える経営基盤の整備」について、
目下進めているのはテレワークの恒久化です。
当社事業は比較的、テレワークを導入・継続しやすい業態であることから、
今後もテレワークを積極活用し、生産性の向上とオフィス費用の削減を図ります。

それでは次のページで重点施策の1点目と2点目の具体戦略についてご説明いたします。

2. 重点施策 ドキュメント集約メカニズムの構築

11

サービス事例（医薬分野）

翻訳サービス

基礎研究から製造販売後まで、各ステージで発生するあらゆる資料に対応
資料間の相互の関連性に配慮した品質管理を行うことで医薬品開発資料の集約化を図る



Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、新たに策定した第五次中期経営計画の重点施策であるドキュメント集約メカニズムの構築についてご説明いたします。

まずドキュメント集約メカニズムの構築を医薬分野を例にご説明します。この図は新薬開発時にどの製薬会社でも作成しているドキュメントを類型化したものです。

まず基礎研究、臨床研究など、いわゆる動物実験の計画や結果の報告書が作成されます。その次の段階で臨床試験、人を使った試験の際は治験実施計画書が作成されて、その承認を得て治験が行われ、のちに治験実施報告書が作成されます。そして、これらの情報が承認申請の時にCTDという形でまとめ上げられます。承認がおりた後、薬が販売されてからは副作用情報を継続的に収集する義務があるため、副作用関連文書も作成されます。これらが新薬開発を取り巻くドキュメントの一連の流れとなります。

これらのドキュメントは内資系の製薬会社ですと日本語から英語に翻訳しますし、外資系の場合は日本語に翻訳した海外の治験データを素に日本国内で治験を行うため、そこでもドキュメントが発生します。

では翻訳において「ドキュメントを集約する」ということはどういうことかを簡潔に述べますと、新薬開発の流れで生じる翻訳を当社に発注いただき、当社でドキュメントを管理したいということです。ドキュメントの集約における当社のメリットは、売上と品質の安定です。加えて付加価値サービスの提案もできるようになります。売上への貢献が高い、メリットのある施策です。

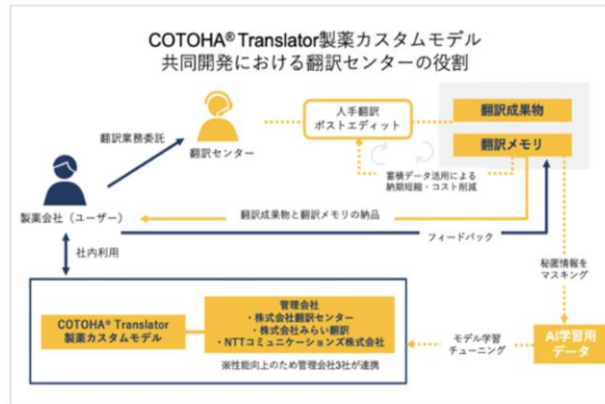
一方、顧客のメリットは2つあります。第一に納期短縮とコスト削減を実現できることです。外資系を中心に新薬開発スピードの短縮化に向けた動きが加速するなかで、ドキュメントの集約により翻訳にかかる時間を極力縮めていくことが可能になりますし、同時にコスト削減も期待できます。もうひとつは品質の安定化です。臨床試験以降は情報を引き継いでドキュメントをまとめあげるため、ドキュメント間で用語の整合性を取ることが品質に直結します。品質の安定にはドキュメントを集約して発注していただくことが不可欠です。

それでは、なぜ納期短縮、コスト削減、品質の安定を実現できるのでしょうか。それは当社は言語を資産化するノウハウ、システムを構築しているからです。当社が持つ、言語を資産化するノウハウやシステムについて、次のページでご説明いたします。

2. 重点施策 ドキュメント別言語資産活用モデルの確立 成功事例

12

- ・臨床試験関連文書に特化した製薬業界向けAI翻訳「製薬カスタムモデル」の共同開発
- ・導入企業数：22社（2023年3月末）
- ・導入後の新業務スキームにより、翻訳品質の安定、コスト削減、納期短縮を実現



Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、新たに策定した第5次中期経営計画の重点施策であるドキュメント別言語資産活用モデルの確立について「製薬カスタムモデル」を例にご説明いたします。

当社では、各製薬会社から拠出いただいたコーパス（原文と訳文が対になったデータ）をもとに非常に精度の高い機械翻訳を開発し、コーパス提供企業にのみ提供しています。このサービスによりモデル導入企業での翻訳品質の安定、コスト削減、納期短縮を実現しています。

我々の狙いは機械翻訳を導入いただくことではなく、機械翻訳の導入によりドキュメントの集約化を実現することにあります。よって、同モデルを契約いただいた企業には人手翻訳の発注集約化を提案しており、実際に他社から当社に発注先を切り替えてくださった顧客もいらっしゃいます。

この仕組みを実現するのに必要不可欠なシステムが2つあります。ひとつは機械翻訳です。当社にはみらい翻訳という、機械翻訳の開発パートナーがいます。これは他の翻訳会社にはない強みです。

もうひとつは翻訳支援ツール（CAT）です。CATはいわば機械翻訳をプロ翻訳者が使う時のプラットフォームです。CATには翻訳メモリ（過去案件をデータベース化したもの）と機械翻訳が組み込まれており、プロ翻訳者は、CATが示す原文との一致度を見ながら翻訳メモリが示す訳文を利用するか、機械翻訳が出力する訳文を手直しするかを一文ずつ判断します。翻訳メモリの管理も言語資産管理ノウハウのひとつとなっています。

CATは世の中に多く存在する、翻訳業界ではマニュアル翻訳時に当たり前のように使われるシステムです。我々は機械翻訳が登場する前からCATを利用し、登録翻訳者の協力を仰ぎながら、CATの活用を推進してきました。この取り組みによって、マニュアル以外の翻訳者でもCATが使いこなせる環境を構築しました。CATと機械翻訳を使いこなすノウハウを持つ翻訳会社は、おそらく当社規模だと日本国内でも皆無だと思っています。これも他の翻訳会社にはない強みです。

当社の優位性をまとめますと、専用の機械翻訳を非常に自由な環境で作成できること、CATを多様な分野で使いこなすことができること、の2つです。いずれも他の翻訳会社がすぐ模倣できるようなことではないと認識しています。これらの強みを武器に顧客内シェアの拡大を図っています。

さらに我々は医薬分野以外でもこの「製薬カスタムモデル」と同じコンセプトで言語資産の活用を提案しようと考えています。次のページで足元の取り組みをご説明いたします。

2. 重点施策 フォーカス市場への取り組み事例

13

IR資料（有価証券報告書）に特化した翻訳サービスの開発・提供について*

背景

- ・英文開示が求められつつも、翻訳に要する期間・費用・開示担当者の負担が課題
- ・特に有価証券報告書については、英文開示が進まない傾向がある



狙い

両社共同で先行サービス（パイロットプログラム）を提供し、顧客課題の最適解となるサービスを開発・育成することで、開示資料の集約化を図る

*2022年11月17日発表の共同プレスリリースより

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、
フォーカス市場への取り組み事例についてご説明いたします。

こちらは昨年11月17日付プレスリリースで発表した、言語の資産化の応用例です。

IR関連文書にはドキュメント間の同一性や経年での類似があることに着目し、プロネクサス社と共同でサービスを開発に取り組みます。IR関連文書のなかでも特に英文化が求められている有価証券報告書（以下、有報）にターゲットを絞って展開します。

このサービスの訴求ポイントは翻訳の高速化とコストの低減です。

「製薬カスタムモデル」では複数の製薬会社から拠出いただいたコーパスを素に専用モデルを開発しました。このサービスでは、IR関連文書の特性であるドキュメント間の同一性や経年での類似性を利用し、各事業会社から拠出いただくIR関連文書からコーパスを作成することで、個社別の専用モデル開発を目指します。この取り組みにより「製薬カスタムモデル」同様、時間短縮とコスト低減を図り、IR関連文書全般に特化した言語資産のナレッジ活用を提案していきたいと考えています。

この取り組みのアナウンス効果もあり、IR関連文書の受注件数は増加しています。まだまだ成長余地があると考えています。

2. 重点施策 言語資産の活用に向けた取り組み事例

14

生成AIを活用した共同プロダクト開発のための実証実験を開始*



狙い オルツの「LHMT-2」やChatGPTに代表される大規模言語モデルを当社ドキュメントで活用した場合の問題点や課題を検証し、効果的な活用場面や活用方法を明らかにすることで、新たなサービスの開発に繋げる

*2023年5月11日発表の共同プレスリリース（PR情報）より

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、
言語資産の活用に向けた取り組み事例についてご説明いたします。

こちらは5月11日付プレスリリースで発表した、オルツ社との取り組みです。

オルツ社は昨今話題のChat GPTに代表される大規模言語モデルを独自開発する企業です。当社はオルツ社と共同で大規模言語モデルを活用したプロダクト開発のための実証実験を始めます。この取り組みを新たなサービスの開発に繋げていきたいと考えています。

3. 第5次中期経営計画 業績目標

15

重点施策の遂行を通じ、さらなる成長と収益性向上を追及

単位：百万円、%

■業績目標	4次中計	5次中計			
	22年3月期 実績	23年3月期 実績	24年3月期 予想	25年3月期 目標	CAGR
売上高	10,337	10,947	11,550	12,100	5.4%
営業利益	811	928	1,000	1,100	10.7%
当期純利益	573	686	700	750	9.4%

■経営指標	4次中計	5次中計		
	22年3月期 実績	23年3月期 実績	24年3月期 予想	25年3月期 目標
連結営業利益率	7.8%	8.4%	8.6%	9%
自己資本利益率 (ROE)	11.9%	12.9%	11.7%	12%

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、新たに策定した第5次中期経営計画の業績目標についてご説明いたします。

第5次中計の重点施策を着実に推し進め、さらなる成長と収益性向上を追求していきたいと考えています。

2025年3月期の売上目標は121億、営業利益は11億、当期純利益は7億5,000万、経営指標として連結営業利益率9.0%、ROE12.0%を掲げています。

2024年3月期の予想につきましては次の章でご説明いたします。

本日のご説明内容

16

I. 2023年3月期 業績

II. 事業戦略と進捗

III. 2024年3月期 予想

IV. 株主還元

次に、2024年3月期の予想についてご説明いたします。

1. 2024年3月期 業績予想

17

増収増益を予想、2期連続の最高益達成を目指す

単位：百万円、%、円

	2023/3期	2024/3期 (予)			1-2Q累計 (予)	3-4Q累計 (予)
			増 減	伸 率		
売上高	10,947	11,550	602	5.5	5,500	6,050
営業利益	928	1,000	71	7.6	410	590
経常利益	960	1,020	59	6.1	420	600
親会社株主に帰属する 当期純利益	686	700	13	1.9	280	420
1株当たり純利益	205.94	209.56	-	-	83.87	125.69
1株当たり配当金	45.0	50.0	-	-	-	-

※2024年3月期予想においては、US1ドル=135円で換算しております。

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、
2024年3月期の通期予想についてご説明いたします。

2024年3月期の予想は
売上高が115億5,000万、YoY5.5%増加、
営業利益が10億、YoY7.6%増加、
当期純利益が7億、YoY1.9%の増加と増収増益を予想しています。
2期連続の最高益達成を目指していきたいと考えています。

2. セグメント別売上高 予想

18

単位：百万円、%

	2023/3期		2024/3期 (予)			
	売上高	売上比	売上高	増減	伸率	売上比
翻訳事業	8,457	77.2	8,815	357	4.2	76.3
特許	2,708	24.7	2,800	91	3.4	24.2
医薬	2,796	25.5	3,020	223	8.0	26.1
工業・ローライゼーション	2,376	21.7	2,395	24	0.8	20.7
金融・法務	575	5.2	600	18	4.2	5.2
派遣事業	1,119	10.2	1,150	30	2.7	10.0
通訳事業	854	7.8	900	45	5.4	7.8
コンベンション事業	152	1.3	300	147	97.2	2.6
その他	365	3.3	385	19	5.4	3.3
売上高合計	10,947	100.0	11,550	602	5.5	100.0

*その他には語学教育事業および外国出張支援事業などが含まれます。

Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、
2024年3月期の事業別売上高予想についてご説明いたします。

翻訳事業は88億1,500万、YoY4.2%の増加と、前期（23/3期）より若干低めの伸びを予想しています。

特許分野は前期に大型案件を受注した大手通信系企業からの今期受注分を予想に織り込んでいないため、YoY3.4%の増加と控えめに設定しています。

医薬分野は「製薬カスタムモデル」導入による仕込時期が終わり、刈り取り時期を迎える顧客もいることからYoY8.0%の増加を予想しています。

工業・ローライゼーション分野はYoY0.8%の増加と、ほぼ横ばいを予想しています。前期の大型案件の反動減を加味していますが、当然ながらこの予想を達成できれば、売上総利益は大きく伸びると目論んでいます。

金融・法務分野はIR関連文書関する施策の加速とIR関連での実績を作ることによる顧客の管理系部門への拡販も目論んでおり、YoY4.2%の増加を予想しています。

派遣事業は前期で底を打ったと理解していますので、緩やかではありますがYoY2.7%の増加を予想しています。

通訳事業はYoY5.4%の増加と控えめの予想をしています。コロナからのリバウンドはいったん落ち着くと見込んでいます。

コンベンション事業の予想はYoYでほぼ倍近くの伸びを予想しておりますが、これは受注済の案件を積み上げた結果です。

3. 損益計算書 予想

19

単位：百万円、%

	2023/3期		2024/3期 (予)			
		売上比		増減	伸率	売上比
売上高	10,947	100.0	11,550	602	5.5	100.0
売上原価	5,860	53.5	6,090	229	3.9	52.7
売上総利益	5,087	46.4	5,460	372	7.3	47.3
販売費及び一般管理費	4,159	37.9	4,460	300	7.2	38.6
営業利益	928	8.4	1,000	71	7.6	8.7
営業外損益	32	0.2	20	△12	△37.6	0.1
経常利益	960	8.7	1,020	59	6.1	8.8
特別損益	0	0.0	—	0	—	—
親会社株主に帰属する当期純利益	686	6.2	700	13	1.9	6.0

Copyright © Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.

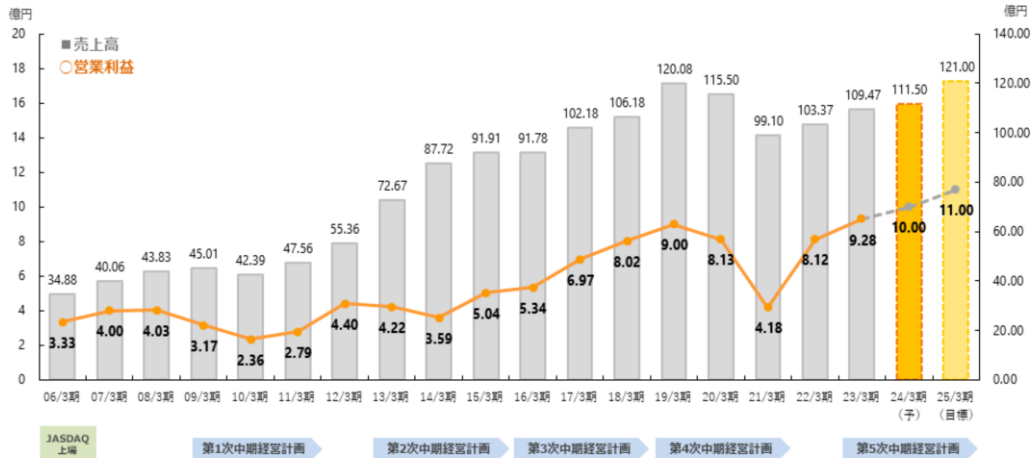


こちらのスライドでは、
2024年3月期の損益計算書予想についてご説明いたします。

先のスライドでもご説明した通り、売上は115億5,000万を予想しています。
売上総利益率は、工業・ローカライゼーション分野の前期（23/3期）に受注した大型案件の剥落と機械翻訳の活用拡大の効果により、47.3%と回復を見込んでいます。

4. 業績推移

3期連続の増収増益、2期連続の最高益達成を目指す



Copyright © Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、
業績推移についてご説明いたします。

売上はコロナ前の2019年3月期の水準には及びませんが、
営業利益は着実に回復しております。
2024年3月期は3期連続の増収増益と2期連続の過去最高益達成を目指しています。

本日のご説明内容

21

I. 2024年3月期 業績

II. 事業戦略と進捗

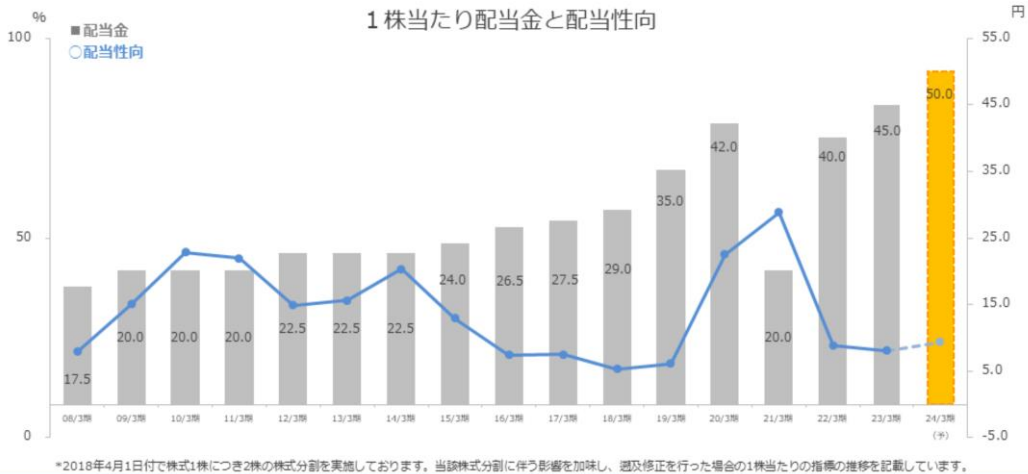
III. 2024年3月期 予想

IV. 株主還元

最後に、株主還元についてご説明いたします。

1. 株主還元

24/3期の配当は1株当たり50円を予想（前期比+5円）



Copyright Honyaku Center Inc. All Rights Reserved.



こちらのスライドでは、株主還元についてご説明いたします。

当社は安定的、かつ、継続的な増配を目標に配当額を決定しています。配当性向率は定めておりません。前期（23/3期）は過去最高益となり、配当額も過去最高水準をお示しすることができました。

2024年3月期は2期連続の過去最高益を予想しております。それに連動するかたちで配当額も1株当たり50円と過去最高水準を予想しています。今後も株主の皆さまへの還元をわずかながらでも高めていきたいと考えています。

以上で私からのご説明を終了いたします。ご清聴ありがとうございました。

【参加者からのご質問】

Q1：Chat GPT（生成系AI）の翻訳事業、通訳事業等への影響は予想されますか。機械翻訳の精度が上がった時には影響はなかったと思います。

A1：結論から申し上げますと、生成系AIの影響についてはニューラル機械翻訳の出現時とまったく同一と捉えており、影響はないと考えています。生成系AI、ニューラル機械翻訳のいずれも同じトランスフォーマー（Transformer）ですので、それらが出力する結果は保証されません。保証作業にはクロスチェックが必要であり、人の介在が不可欠です。当社は既に効率的な体制やプラットフォームを構築しています。

ただ生成系AIはさまざまな使い方ができるため、使い方によっては別の影響がでてくる可能性もあると考えています。当社においては、現時点で想定する使い方をオルツ社とともに確認しながら、当社サービスに繋げることができるのかを検証していきたいと考えています。

参考資料

1. 事業セグメントおよびグループ会社 一覧

24

	翻訳 事業	通訳 事業	派遣 事業	コンベンション 事業	その他
翻訳センター	●				●
アイ・エス・エス		●	●	●	●
外国出願支援サービス					●
パナシア	●				
HC Language Solutions, Inc.	●				
メディア総合研究所	●				

*2015年4月設立のランゲージワン（株）（多言語コンタクトセンター事業）は持分法適用会社につき、事業セグメントには含まれておりません。

*（株）アイ・エス・エスは2020年4月1日付で語学教育事業を展開する（株）アイ・エス・エス・インスティテュートを吸収合併しています。

*語学教育事業は、量的な重要性が低下したため2022年3月期4Qより報告セグメントから除外し、その他として記載する方法に変更しています。

2. 連結業績推移

25

	2018/3期	2019/3期	2020/3期	2021/3期	2022/3期	2023/3期
売上高 (百万円)	10,618	12,008	11,550	9,910	10,337	10,947
経常利益 (百万円)	812	905	822	465	841	960
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	566	630	304	117	573	686
資本金 (百万円)	588	588	588	588	588	588
発行済株式総数 (株) (*1)	1,684,500	3,369,000	3,369,000	3,369,000	3,369,000	3,369,000
純資産額 (百万円)	3,939	4,350	4,545	4,524	5,090	5,672
総資産額 (百万円)	5,741	6,486	6,222	6,295	7,172	7,486
自己資本比率 (%)	68.6	67.0	73.0	71.8	70.9	75.7
売上高経常利益率 (%)	7.5	7.4	7.0	4.7	8.1	8.7
従業員数 (人) (*2)	518	507	522	509	520	521
登録者数 (人) (*3)	4,221	2,889	3,030	3,249	2,681	2,815

*1 2018年4月1付で普通株式1株につき2株の株式分割を実施

*2 連結正社員数

*3 翻訳センター単体登録者数、19/3期より算出方法を一部変更

3. 事業別業績推移

26

単位：百万円

	2018/3期	2019/3期	2020/3期	2021/3期	2022/3期	2023/3期
翻訳事業	7,593	8,506	8,112	7,520	7,828	8,457
特許	1,880	2,139	2,258	2,100	2,316	2,708
医薬	2,744	2,897	2,749	2,875	2,904	2,796
工業・ローライゼーション	2,239	2,725	2,472	2,038	2,028	2,376
金融・法務	729	744	632	505	580	575
派遣事業	1,127	1,192	1,200	1,228	1,212	1,119
通訳事業	933	1,039	1,022	477	655	854
コンベンション事業	496	677	782	298	220	152
その他	466	592	432	385	420	365
売上高合計	10,618	12,008	11,550	9,910	10,337	10,947

4. 損益計算書 推移

27

単位：百万円、%

	2018/3期		2019/3期		2020/3期		2021/3期		2022/3期		2023/3期	
		構成比		構成比		構成比		構成比		構成比		構成比
売上高	10,618	100.0	12,008	100.0	11,550	100.0	9,910	100.0	10,337	100.0	10,947	100.0
売上原価	6,112	57.5	6,999	58.2	6,625	57.4	5,536	55.9	5,429	52.5	5,860	53.5
売上総利益	4,506	42.4	5,009	41.7	4,925	42.6	4,373	44.1	4,907	47.4	5,087	46.4
販売費及び一般管理費	3,704	34.8	4,108	34.2	4,111	35.6	3,955	39.9	4,096	39.6	4,159	37.9
営業利益	802	7.5	900	7.4	813	7.0	418	4.2	811	7.8	928	8.4
営業外収益	10	0.0	5	0.0	10	0.1	49	0.4	40	0.3	49	0.4
営業外費用	0	0.0	0	0.0	1	0.0	2	0.0	10	0.0	17	0.1
経常利益	812	7.6	905	7.5	822	7.1	465	4.6	841	8.1	960	8.7
特別損益	12	0.0	50	0.4	△324	-	△193	-	△2	-	0	0.0
税金等調整前当期純利益	824	7.7	954	7.9	498	4.3	271	2.7	838	8.1	960	8.7
親会社株主に帰属する当期純利益	566	5.3	630	5.2	304	2.6	117	1.1	573	5.5	686	6.2
販売費及び一般管理費	3,704	100.0	4,108	100.0	4,111	100.0	3,955	100.0	4,096	100.0	4,159	100.0
人件費	2,653	71.6	2,878	70.0	2,926	71.2	2,786	70.4	2,984	72.8	2,997	72.0
人件費以外	1,051	28.4	1,230	30.0	1,185	28.8	1,169	29.6	1,112	27.2	1,162	28.0

5. 貸借対照表 推移

単位：百万円

	2018/3期	2019/3期	2020/3期	2021/3期	2022/3期	2023/3期
(資産の部)						
流動資産	4,668	5,220	5,213	5,515	6,311	6,611
固定資産	1,072	1,265	1,009	780	861	875
資産合計	5,741	6,486	6,222	6,295	7,172	7,486
(負債の部)						
流動負債	1,718	1,974	1,503	1,595	1,891	1,618
固定負債	83	161	173	175	190	195
負債合計	1,801	2,135	1,676	1,770	2,081	1,813
(純資産の部)						
I. 株主資本	3,923	4,332	4,531	4,514	5,068	5,630
II. その他の包括利益累計額	15	17	13	10	22	42
純資産合計	3,939	4,350	4,545	4,524	5,090	5,672
負債純資産合計	5,741	6,486	6,222	6,295	7,172	7,486

株式会社翻訳センター 経営企画室

TEL:03-6369-9963 E-mail:ir@honyakuctr.co.jp

URL : <https://www.honyakuctr.com/>

本資料は、業績に関する情報の提供を目的としたものであり、当社が発行する有価証券の投資を勧誘するものではありません。
本資料に掲載された意見や予測等は資料作成時点での当社の判断であり、その情報の正確性、完全性を保証し、または
約束するものではなく、また今後、予告なしに変更されることがあります。